

ハワイ人とキリスト教の歴史①

宣教前夜

誰もがその名を知るハワイの王様、カメハメハ大王はハワイ島を統治すると、マウイ、モロカイ、オアフと次々に他島を制圧し、最後にカウアイ島を併合して1810年にハワイ諸島を統一した。彼は、戦闘に際しては外国人アドバイザーや西洋の兵器や船を有効に活用する一方で、伝統的な宗教も堅持した。カウアイ島に侵攻せず敵の王と和睦を結んだのも、あるカフナ(神官)の予言に従ったことであつたという。こうして彼はハワイの古い伝統と外来の新しい技術を巧みに融合させ、統一後は中央集権化を進めて強固なハワイ王国を築いた。

ところで、ハワイ社会の根幹を支えていたのが、カプ制度と呼ばれる伝統的宗教体系である。「カプ」とは、聖と俗とを区別して、両者が接触することを禁じる考えや規則を指し、タヒチ語のタブと同様、「タブー」の語源でもある。ハワイ人にとって、カプ制度は、神の加護を獲得し、万物のマナ(聖なる力)が衰えるのを防ぎ、社会的秩序を維持するものであつた。例えば、男女が同席して食事をするのを禁じる「アイ・カプ('ai kapu)」や女性に対する様々な食物タブーが課されたりした。ただし、人々の敬愛する首長が死んだ後の喪の期間は、カプが一時的に解かれるのが慣わしであつた。

1819年5月にカメハメハ1世が死ぬと、その息子であるリホリホがカメハメハ2世に即位する。彼は、喪が明けてからカプの再開を宣言しなければならなかつたが、摂政であつたカアフマヌ王妃らに説得され、同年11月に彼女達と共に食事することでアイ・カプを放棄し、続いて全てのカプの廃止を全島に告げた。ここにカプ制度は終わりを告げ、ヘイアウ(神殿)は取り壊され、神々の儀式は執り行われなくなり、カフナは影響力を失い、人々は社会生活を支える法律や宗教を失うことになった。1820年3月、プロテスタントの宣教師達がハワイにやって来た時、ハワイ社会はこの伝統的宗教制度の崩壊の結果、宗教的真空状態に置かれていたのである。

初期の宣教史

18世紀後半に合衆国のニューイングランドを中心に信仰覚醒運動が起こり、運動の中で海外伝道への機運が高まって、19世紀初頭に会衆派と長老派を中心に組織されたのが「アメリカ海外伝道評議会(ABCFM: the American Board of Commissioners for Foreign Missions)」である。1820年に初めてハワイにやって来た宣教師達は、このABCFMによって派遣された一団であり、1848年までに計12回の宣教師団が派遣された。

一方、フランスのカトリックが本格的にハワイで宣教活動を開始するのは、1827年に伝道団が派遣されてからである。しかし、カアフマヌ王妃を初めとする多くの王族達はすでにプロテスタントに改宗しており、カトリック伝道団は彼らの協力を得られないばかりか、布教活動の禁止や国外への退去を命ぜられたりした。以後、1839年に弾圧が緩和されるまで、ハワイ人のカトリック信徒は反カトリック政策のもと迫害された。

1850年、第3の宣教師団である末日聖徒イエスキリスト教会(モルモン教会)が活動を開始した。彼らは、初期の段階よりハワイ人を教会内の様々なポストに登用して、積極的に伝道活動を展開した。その後、本国組織と合衆国政府との関係悪化により、1858年に白人宣教師はハワイから撤退し、現地の方

動は一時的に混乱してしまう。しかし、モルモン教宣教師はフラなどの伝統芸能に比較的寛容であり、ポリネシア人は古代へブライ人の子孫であるという独自の教義も手伝って、ハワイ人信徒を獲得していった。

次にハワイで宣教活動を開始したのは、英国聖公会(the Church of England)である。彼らは1862年に本格的に始動し、カメハメハ4世が反米的立場を取っていたこと、英国聖公会の王室観がハワイ王朝に適合していたことなどから、一部の王族を教会のメンバーに迎え入れることができた。しかし、ハワイはすでにプロテスタントとカトリックが地盤を固めた後であり、モルモン教も着実に信徒を獲得していた時期であつたので、期待通りに成果を上げることはできなかった。

他のプロテスタント宗派も19世紀後半から20世紀初頭にかけて活動を開始するが、以上の4つの宗派がハワイ人のキリスト教化において重要な役割を果たしたと言える。その中でも、会衆派教会はハワイにおける文化、政治、経済といったあらゆる分野に多大な影響を及ぼし、膨大な歴史的資料も残している。また、現在のハワイ人系教会のほとんどが会衆派の伝統を引き継いでおり、同宗派を抜きにしてハワイ人のキリスト教を語ることはできない。

19世紀のハワイ人と会衆派教会

先にも述べたように、1820年にABCFMの宣教師達がハワイにやって来た時、ハワイは既に政治的に統一されていただけでなく、カプ制度の廃止による宗教的真空状態にあつた。また、宣教師達はタヒチで活動を展開していた「ロンドン伝道協会(LMS: the London Missionary Society)」の経験から多くのことを学び取り、ハワイ語に近い言語であるタヒチ語に精通していたLMSの宣教師の協力を得ることができた。このように、絶好の条件を得て、ABCFMの宣教活動はスタートする。彼らはハワイ語をアルファベット化し、ハワイ語聖書や教科書を出版、各地に学校を設立して、ハワイ人の教育に力を入れた。この教育活動は王族達にも支持され、1831年には学校数は1,100に達し、生徒数は52,000人に上った。

しかしながら、本来の目的であつたハワイ人の改宗は、1837年の時点で信徒数が1,049名であり、教育面の成果と比べると目を見張るものではなかつた。厳格なカルビン主義者であつた初期の宣教師達は、ハワイ人を正規の信徒として教会に受け入れることに過度に慎重であつたのである。しかし、本国組織の指導により、幾つかの教会はハワイ人信徒の受け入れに対して徐々に寛大な方針を取るようになり、1837年から1840年にかけてハワイ島のヒロを中心に起こつた「信仰大復興(the Great Revival)」の素地を作ることになる。

この信仰復興を契機に、会衆派教会は急激に信徒数を増加させて着実にハワイ人の間に浸透していった。1823年にABCFMとLMSの宣教師達によって組織された「ハワイ協会」は、1854年に「ハワイ伝道協会(HEA: the Hawaiian Evangelical Association)」に改編され、一般信徒にも門戸が開かれた。1863年、本国組織はハワイのキリスト教化が完了したものと見なし、宣教師の派遣と経済的援助を打ち切つた。その結果、HEAは独立組織となり、新たに「評議員会」を設置したのである。